

マルコによる福音書 9章 30節～37節

2017年1月26日

古本 靖久

1、聖歌 277番 「幼子を抱き上げ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 79 ページ）

4、テキストの位置

今回、イエス様が二度目の受難予告をする場面が出てきます。第一回の受難予告は8章31～33節に出てきました。

そのとき、イエス様たちはフィリポ・カイサリア地方にいました。地図を見ると、主に活動していたガリラヤからは少し外れた地域です。

そこからイエス様は、受難への道を歩みだします。フィリポ・カイサリアからガリラヤを通過して、エルサレムへと向かうのです。その途中であるガリラヤの地で、イエス様は二度目の受難予告をされます。

聖書を見ていると、受難予告と弟子教育とはセットになっていることに気づかされます。（第三回受難予告の後は、ヤコブとヨハネの願い）。

イエス様はなぜ何度も受難予告をされたのか、またそれを聞く弟子たちの心情はどうだったのでしょうか。そして受難予告を通してイエス様は何を語ろうとされたのか、見ていきたいと思えます。

受難への道	8:27-30	イエスとは何者か
	8:31-33	第一回受難予告
	8:34-9:1	弟子であることとは
	9:2-13	イエスの栄光
	9:14-29	信仰と祈り
	9:30-32	第二回受難予告
	9:33-37	弟子への教育
	9:38-41	イエスの味方
	9:42-50	小さな者に対して



イエスが宣教した町々

5、節ごとに

◆第二回受難予告

9:30 一行（彼ら）はそこを去って、ガリラヤを通って行った。しかし、イエス（彼）は人に気づかれる（誰かが知る）のを好まれなかった。

イエス様はそこ（フィリポ・カイサリア地方）を去って、歩みます。しかしガリラヤが目的地ではありませんでした。「ガリラヤを通って」という言葉が示す通り、あくまでもガリラヤは通過点です。

この旅の目的地は、エルサレムです。そしてその道は、十字架への道です。しかしイエス様は、弟子たちがその意味を理解しているとは感じていませんでした。

イエス様は人々に気づかれないように移動しました。前にティルスという場所でシリア・フェニキアの女性と関わったときにも、「だれにも知られたくない」とありました。そこは異邦人の地であり、イエス様はユダヤの人々に対して活動をしている段階だったので、そのような考えがあったと思われます。

しかし今回は、群衆と関わるのを嫌がったということではありません。受難というとても大切なことを弟子たちに教えるために、弟子たちだけを集めたのです。今、一番必要なことは弟子たちを教育することだと、イエス様は考えられたのです。

9:31 （なぜなら）それ（彼）は（彼の）弟子たちに（教えて）、「人の子は、人々の手に引き渡され、（彼らは彼を）殺される（す）。殺されて三日の後に復活する」と言っておられたからである。

二度目の受難予告は、ガリラヤでなされました。前回同様、この予告は弟子たちに対しておこなわれます。また十字架という言葉が出てこないのも同じです。そして三日の後の復活も前回と一緒です。

しかし、第一回では「長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて」となっていたところが、「人々の手に引き渡され」と変えられています。

人々とは誰のことでしょうか。かつてユダヤ人を迫害してきた人々は、その理由の一つとして「イエス・キリストがユダヤ人によって殺された」ことを挙げました。しかし果たしてそうでしょうか。引き渡すという言葉には、「裏切る」という言葉があります。しかしイエス様を裏切ったのは、イスカリオテのユダだけだったのでしょうか。イエス様を殺す人々とは、いったい誰のことなのでしょうか。

9:32 (しかし) 弟子たち(彼ら)はこの言葉が分から(理解でき)なかったが、(そして、) 怖く(恐れて彼に) 尋ねられなかった。

イエス様の言葉を聞いた弟子たちには、その意味が理解できませんでした。マルコ福音書はしつこく、弟子たちの無理解を強調していきます。しかしそれは弟子たちをこき下ろすためだけではなくて、わたしたちの心の動きを弟子たちと重ね合わせて読ませるためなのかもしれません。

一度目の予告のときには、一番弟子であるペトロがすぐに反応しました。

しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」(8:32-33)

今回は誰も何も言いませんでした。イエス様の受難と復活を人間的な視点で考えてみても、理解することなどできないのです。前回、ペトロがサタン呼ばわりされたことに震えていたのか、それともエルサレムに向かう中で、Xデーが近づいていることに対する恐怖なのでしょう。

<ここまでの箇所から>

弟子たちはイエス様と、「恐れ」の中で旅をします。自分たちの進む先に何が待っているのか、何も知らないわけではありません。イエス様が自分たちに対して示したことが、理解できなかったのです。

マルコによる福音書は、もともと 16 章 8 節までしかなかったと考えられています。(16 章 9 節以下は括弧に入れられています)。その最後はこのようになっています。

婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

彼女たちは空になった墓の横にいた若者に、イエス様が復活されたことを告げられます。しかし喜びではなく恐怖に支配されていました。その若者の言葉に、確信をもつことが出来なかったからかもしれません。

マルコによる福音書には、復活したイエス様が肉体をもって誰かの前に現われたという記事はありません。それは誰もが、与えられた希望に向かって、疑い、恐れつつ歩んでいくことを意味します。そしてそれぞれの時に、復活のイエス様に出会うのです。

◆弟子への教育

9:33 (そして) 一行(彼ら)はカファルナウムに来た。(そして) 家に着いてから(の中にいたときに)、イエス(彼)は弟子たち(彼ら)に、「(あなたたちは) 途中(道)で何を議論していたのか」とお尋ねになった。

さて、イエス様たちはガリラヤのカファルナウムに戻ってきました。四人の漁師を弟子にして最初にやって来た場所が、カファルナウムでした。この家は、以前ペトロのしゅうとめをいやした場所だという説もありますが、根拠はありません。

この時代、「家」という場所は重要な役割を担っていました。たとえばユダヤ教にはいろいろな祭りがありますが、家長である父親は祭りのたびに、なぜこのようなことをおこなうのかを家族に伝える義務がありました。

たとえば過越祭のときには酵母を入れないパンを食べますが、そのときには出エジプトの出来事を思い起こし、伝えていくのです。そのほかにも、律法や伝承など、様々なことを「家」で教えていました。

イエス様は弟子たちに質問します。これまでは弟子たちがイエス様に質問していたのですが、ここではイエス様から弟子たちに、「何を議論していたのか」と尋ねます。

9章14節でも、弟子たちは律法学者たちと議論をしていました。しかし今回使われている「議論する」という語は9:14とは少しニュアンスが違います。その意味は「誰かに聞かれるとは思わなかった内緒話や私語」です。つまりあまり聞かれない会話だったのです。

9:34 (しかし) 彼らは黙っていた。(なぜなら彼らは) 途中で(道で)、だれがいちばん偉いか(より大きい)かと議論し合っていたからである。

思い出してみましょう。この箇所直前で、イエス様は何を予告していたのでしょうか。弟子たちはそれを聞いて恐れていたはずですが、ところが弟子たちの議論の内容は…。

わたしたちの間でもそうですが、食事や会合で座る順番や階級などを議論することは、ごく一般的でした。またユダヤ教の指導者であるラビは、新しい時代には誰が最も偉大なのか、議論をしていたようです。

しかし弟子たちには、この議論がイエス様の思いに反していることはわかっていたようです。だから口を閉ざしたのでしょう。

9:35 (そして) イエス (彼) が座り、十二人を呼び寄せて (彼らに) 言われた (う)。「(もしも誰かが) いちばん先に (第一の者に) になりたい者は (と思うならば)、すべての人の後 (最後の者) になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

黙っている弟子たちの前で、イエス様は座ります。当時腰を下ろして語るの、教師として正しく教えることを意味しました。4章1節で種を蒔く人のたとえを語られたときも、イエス様は腰を下ろしています。



12人とは弟子たちのことですが、マルコ福音書の中ではかなり否定的な形で登場します。ですからここでは、「指導者とみられている人たちがイエス様に説教されている」場面として見る事ができると思います。

「第一の者になりたいと思うならば」とイエス様が切り出したところを見ると、イエス様は弟子たちが何を議論していたのか、知っていたようです。第一の者とは、政治的に最高の地位にある者を呼ぶ言葉です。ですからイエス様は、この世の権力に固執するな、威張りくさるような人物になるなと伝えたかったのです。

そうではなく、仕える者になりなさいと言われます。仕える者とは、当時の社会では奴隷のことです。社会的に最も低い身分の者としてあなたがたは振舞いなさいと、弟子たちに語るのです。

9:36 そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、(そして) 抱き上げて (彼らに) 言われた。

そして、イエス様は具体例を挙げるために、子どもを抱き上げました。わたしたちの感覚では、ごく普通の出来事です。ところが当時の社会習慣では、子どもの人格は認められておらず、教師の近くをうろつくなんて、もってのほかでした。

イエス様がこのときになされたことは、「子どもの好きなイエス様」という言葉で片付けられるほど、単純なことではありませんでした。子どもは女性と一緒にいなければならなかったし、女性もまた教師の話を書くことは許されていませんでした。ありえない状況が弟子たちの目の前にあったのです。

9:37 「わたしの名のため（故）にこのような子供（たち）の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。（そして）わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

子どもを受け入れることが、神さまを受け入れることになる。それだったら何となくできそうです。しかし先ほどの説明でもわかるように、当時の社会では子どもを一人の人間として受け入れることは、考えられないことでした。

しかしイエス様は、ご自分の名のもとに行動するのであれば、数にも入れられていない子どもたちを受け入れるようにと言われます。それはイエス様が、本当に小さな一人ひとりを受け入れたからです。またイエス様自身が、小さな者として歩まれたからなのです。

<今日の箇所から>

わたしたちは公共の場で、子どもたちが騒いでいた時にどのような顔をするでしょうか。子どもたちに注意をすることもあるでしょうし、親に一言言うこともあるかもしれません。そのようなときに、この聖書の箇所を思い浮かべることはないでしょうか。

しかしイエス様は、この箇所ですのような子どもでも我慢して受け入れなさいと言われていたのでしょうか。それもあってでしょうが、それだけではありません。

当時の社会において、子どもは社会全体で守らなければ生きていけない存在でした。親を亡くした子もいれば、捨てられた子もいました。しかし残念ながら子どもには価値があると思われておらず、取るに足りない者だと考えられていました。

その状況の中でイエス様は、子どもを抱きかかえて、小さな者を受け入れるとはどういうことかを示します。小さな者を受け入れる、それが神さまの思いです。だから神様から見たら小さいわたしたちも、神さまに受け入れられたのだということを、忘れてはなりません。

イエス様はわたしたちにも、このような子どもの一人を受け入れるようにと言われます。わたしたちにとって、「子ども」とは誰のことでしょうか。取るに足りない小さな者とは誰ですか。よそ者として交わりを拒否している相手はいないでしょうか。自分自身に問い続けていきたいと思えます。

今回の学びはこれで終わります。次回は 2 月 23 日(木)10 時 30 分からです。「イエスの味方、小さな者に対して」（マルコ 9：38～50）について学んでいきます。